

受け継がれる思い

—大谷幸夫先生を偲ぶ会—

What we should learn and follow — A Gathering in Memory of Sachio Otani—

5月11日(土)に、当研究室二代目教授を務められた大谷幸夫先生を偲ぶ会が弥生講堂にて行われました。縁ある方々のたくさんの思い出話とともに最期のお別れを惜しみました。

text_segawa

ぽつぽつと小雨がぱらつく中、300人を超える来場者が訪れ、各界の方々が生前の大谷先生との思い出や功績を語られました。京都国際会館や東大の法学部4号館などの施設設計時の思い出話、大谷先生の設計に対する思いや、京都国際会館コンペで最優秀賞をとる以前の苦勞なされた時代、ご家庭での意外な一面など、様々な側面から大谷先生自身のお人柄について、また同時にこの研究室の歴史の深さを知ることができました。長い時間培われてきた大谷先生をはじめ、歴代の研究室の方々の思いを受け継ぎ、これからも邁進したいと考えています。



▲大谷先生への思いを語られる



▲設計された数々の作品の展示

西村 幸夫 教授 「大谷幸夫先生を偲ぶ会で思うこと」

偲ぶ会で10人を超す関係者が大谷先生の思い出を語ってくれましたが、そこにひとつ共通するものがあるとすると、それは「ひと」に対する想いの深さだと感じました。建築を通してメッセージを伝えようとする、誰のための建築かを真摯に考える姿勢は、私が個人的に接してきた大谷先生の姿と重なります。

もうひとつ、これに関連して思い出すのは、「個即全」という言葉です。これは、大谷先生が責任編集をされた『都市住宅』1972年12月号のタイトルですが、個の

中に全宇宙が反映されているという考え方は、それはまた、たったひとつの建築プロジェクトを追究することのなかからも全世界とかかわることができるのだ、という先生がたどり着いた思想の表現でもあります。まわりがどんなに大風呂敷の中ではしゃいでいようと、たったひとりでのひとつのことを突き詰めることにも意味があるのだという先生がたどり着いた思想です。小さなプロジェクトであったとしても、その中で世界を理解することができる、したがって、目の前のプロジェクトに没頭する

ことは意味のあることなのだ、という世界の理解の仕方です。

これは別の見方をすると、ひとりの人間のなかにも全宇宙があるのだから、けっしてひとりの人を軽んじてはいけない、という教えにもつながります。

これが偲ぶ会当日の多くの方のコメントの背後に連なる大谷先生の信条だと感じました。この想いを大切に胸に秘めていきたいと私自身も思います。



大谷幸夫先生の生涯

■経歴

1946年 東京大学第一工学部建築学科卒業
1961年 設計連合を設立
1964年 東京大学工学部都市工学科助教授
1971～84年 同教授
1983年 千葉大学工学部建設学科教授兼任
1984年 東京大学を定年退官。東京大学名誉教授
1989年 千葉大学を定年退官。
以後株式会社大谷研究室代表として設計活動

■受賞歴

1963年 国立京都国際会館設計競技 最優秀賞
1966年 建築業協会賞 天照皇大神宮教本部道場
1967年 建築業協会賞 国立京都国際会館
1983年 日本建築学会賞 金澤工業大学キャンパス
1985年 愛知県新文化会館設計競技 優秀賞
1992年 建設業協会賞 沖縄コンベンションセンター
1993年 建設業協会賞 多摩ニュータウン15住区
ベルコリース南大沢
1997年 日本建築学会大賞 建設と都市に関わる
一連の設計・社会活動・教育における功績
建築業協会賞 千葉市美術館・中央区役所

■主な作品

国立京都国際会館
沖縄コンベンションセンター
天照皇大神宮教
北里大学
金沢工業大学
国立環境研究所
東京大学法学部4号館・文学部3号館

■主な著書

空地の思想(1979)
都市的なるものへ—大谷幸夫作品集(2006)
建築家の原点—大谷幸夫 建築は誰のために(2009)
都市空間のデザイン—歴史の中の建築と都市(2012)

"Road to Doctor"

An Essay by doctoral student vol.5!

Study on Commoning Activities under Different Construction Mechanisms in Fishing Village in Zhoushan

D3 田乃魯

In the past, traditional fishing villages in Zhoushan were led by village elite class, which could be considered as an autonomous organization for village managing. As for the village construction mechanism under this traditional village rules, one of the most important facts is commoning, through which every villager could participate in village planning or building designing to satisfy their own demands. This kind of construction mechanism, however, was destroyed with social changes, which resulted in commoning activities in fishing villages disappearing at some time. It is noticed that the initiating and developing of commoning activities are dependent on autonomous force in rural areas, which has been often suppressed by state's administrative power since modern times in China. Therefore it is necessary to find certain construction mechanism for fishing village building, which is helpful for cultivating civil society, to promote commoning activities in



▲ New fishing village with better environment and less outdoor activities

人数の多い都市デザイン研究室。よりお互いの研究について知る機会を作ろう！ということで、博士課程のメンバーの研究内容に迫るコーナーです。第5回目はD3の田さんです。

China. Through studying the evolution of power structure in rural areas and the development of rural planning, I find out 4 kinds of construction mechanisms of fishing village in different historical periods in Zhoushan. And I also find related information of commoning activities under these 4 construction mechanisms respectively by case study on selected 4 fishing villages in Zhoushan, where common spaces and semi-common spaces which were created through commoning activities play an important role in social communication and development. Then, it is concluded that 4 facts including building rules, helper system, shortage of space and collective demands can improve commoning activities. Based on these 4 facts, some suggestions on fishing village planning and construction could be proposed to help creating common spaces in fishing village in the future.



▲ Traditional fishing village with poor environment and more outdoor activities

プロジェクト報告



清水 Shimizu-project プロジェクト

text_takanashi

5月12(日)、13日(月)に黒瀬先生、M2 遠藤・萩原・越村、M1 瀬川・高梨・道喜で清水港の現地調査に行ってきました。初日はM1のために清水を紹介していただき、三保半島や商店街などの周辺地区から港湾地区に近づく形で見学しました。二日目には市役所に出向き、商工会議所の方々と打ち合わせを行い、今年度の活動の方向性について議論を行いました。方向性として、清水の資源を活かした計画を東大がPJに直接関わらなくても動き続ける形で描くことを強調していきました。清水港は初めてでしたが、その親水性やスケール感に圧倒され、多くの資源を持つ場所だと感じると同時に、その産業利用からの転換には動線計画などを含めた都市構造の再考の必要性を感じる調査でした。



▲世界遺産登録を逃した三保の松原



▲予想以上に稼働していた倉庫群



佐原 Sawara-project プロジェクト

M1 Charles Lau

I went to Sawara for the first time. We went to Sawara to meet with the towns people and also to have a meeting with the Sawara City Office. The image that I had of Sawara was that the people are friendly and that they care deeply about their town. Indeed, Sawara is a very beautiful city with a lot of culture and heritage but when we went there, it was very quiet and many buildings were not occupied. I think that more can be done to help to make Sawara town a more lively city such as promoting it more to tourists from outside Japan. While researching on Sawara on the internet, I found very little information in English about Sawara. With more liveliness in the city, I'm sure that it will bring more smiles to the people of Sawara.



▲ Picturesque Postbox



▲ Tourist Cycling in Sawara



編集後記

瀬川 明日奈

はじめまして、外部からきましたM1の瀬川です。ちょうどこの欄の上にある佐原PJ報告の郵便ポストの隣で怪しい笑みを浮かべている者です。いつの間にか5月も終わりに近付き、毎度の如く時間の経過の速さに絶望しています。最近、満員電車の対処法は精神を無にすること、膨よかな紳士のお腹に寄りかかりながらさり気なく休むことだと学びました。もうすぐ夏到来ということで、どなたか夏の高温多湿な満員電車への対策などあれば、ご教示いただければと思います。

5月・6月の予定

Information

5月25日 13:00 ~ まち大演習講評会 @14号館 141号室
 5月27日 18:00 ~ URBAN×ICT セミナー @14号館 145号室
 5月28日 研究室会議
 6月11日 研究室会議